

令和5年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文小学生の部 優秀賞(事務次官賞)

「 アラームメールが教えてくれる危険 」

岐阜県 岐阜大学教育学部附属小中学校 5年 若原^{わかばら} 由梨乃^{ゆりの}

「チャラララン、チャラララン」、

8月16日15時30分頃に、お兄ちゃんのけい帯電話から、きん急速報（エリアメール）の騒がしい音で私はびっくりして飛び起きた。それは、岐阜市に避難かんこくが発令された合図だった。

8月15日以降、西日本を横断した台風7号により降り続いた雨は、川の水があふれたり、洪水、土砂崩れが全国で同時にたくさん起こるといふ普段では考えられないことを引き起こした。私の住む岐阜県でも、8月14日から8月18日までの雨の総量が、本巣市樽見で443.5ミリを記録し、岐阜市でも、三輪地区の石田川から川の水があふれ、水に浸かった家が3棟あった。そして、一番心配したのは、おじいちゃんが住む揖斐川町で土砂崩れが発生したことを知った時だった。

揖斐川町は町のほとんどが山地であり、その被害は、春日六合鹿虎地区で土砂が流れ出したり、山が崩れたりした災害が15か所あったとおじいちゃんから聞いた。そうなのだ。おじいちゃんは無事だったのだ。よかった。

このエリアメールをきっかけに、土砂災害について興味をもった。

今回の様な、土砂災害への対策は、離れた場所に暮らす家族に直接避難を呼びかける「逃げなきゃコール」や、私のお兄ちゃんなどの若い世代が、山に住んでいるおじいちゃん、おばあちゃんに危険が予測されるときに、車などで迎えに行くなどの対策は有効だと思う。しかし、血縁が薄れている現代では、十分な対策とは言えないのではないだろうか。

また、災害の起こった地域を調べてみると、古い時代から繰り返し災害が起こっていることが多いことに気が付いた。

つまり、過去の災害の知識が引き継がれていけば、命を失わずにすむケースがあると思う。だから、数十年単位といわず、数百年単位の災害情報に手軽にアクセスできる仕組みがあったらいいと思う。

実際に、災害の記憶を残していこうという「3・11伝しようロード」という取り組みが、東日本大震災の被災地で進んでいる。

それは災害伝しよう施設を認定して、ネットワーク化し、誰でも簡単に訪れることができ、災害の記おくと経験を後の世代に伝えることができるよう、国と東北地域の4県が一体となって実施しているものだ。

いつ、どこで、どんな災害が起こるか、正確なことは誰にもわからない。

それでも過去の災害情報として、災害を受けた人の経験をすることは、先が見えない未来を生き抜く力になるはずだ。

全国各地でたくさん発生する大災害の記おくをいかに後の世代に伝えていくか、そして自分の住む地域の過去の災害情報をどれだけ正確に得ていくか。これらが命を守るための重要なカギになると思う。

災害対策はまさに「温故知新」だ。

自分が住む地域の古い災害の記録を調べたり、周囲の高齢の方から話を聞いて、今後の減災につながる情報を得ていきたい。

そして、家族全員や、隣近所の地域の方々と一緒に災害から身を守って、生き残っていきたい。